

学生参画による大学運営とFD活動の新展開

申請者 住吉廣行

プログラムの概要 (400字以内)

大学では、似たような社会・文化の環境に育った同世代の人間が、共通の学びを介して、少し規模は小さいが社会生活を営んでいる。

そこでは学生が中心となって、体育・文化活動等の諸行事が実施される他に、学外団体との共同での取組や、自らの活動を発表する機会もあるなど、多くの学生の意見をまとめながら、学友会活動を具体的に推進していくエネルギーが発揮されている。

本学の教職員は、こうした学生の自主的活動の中に、社会性の涵養を図る要素が数多く盛り込まれていると認識しており、側面から支援してきている。

本取組では、学生の活動をその本分である学習活動にまで広げようとしている。これまでアンケート調査など間接的に意見を聴取していたFD活動を、学生参画による直接対話で、協働して授業改善を図るという新展開を目指すものである。

これまで培ってきた学生との信頼関係に依拠して、前向きな学びの姿勢を引き出す、新たな挑戦と考えている。

(取組の概要文字数： 399字)

キーワード：学友会活動、社会性の涵養、FD活動、学生参画、信頼関係

申請にあたって

学生支援G P 学生参画によるFD活動

これは今年度から始まった、学生支援G Pと略称されるプログラムへ応募するための申請書である。申請額などの部分はカットされている。この申請書では、これまで行ってきた組織的な学生支援活動の実績(どういう考えで、何を、どのようにやってきたか)を記すことが前半に求められている。その中で不十分だと認識している点を自ら指摘し、それを克服するために何を、どのように、どういった考えで行うかを後半で記述することになっている。採択された場合、補助金の対象になるのは後半部分についてだけである。

これまで積み上げて来た学生支援の実績にたち(既に過去2度、特色G Pに採択されている)、また学生との間に築いてきた信頼関係に依拠して、今回は教育改革の本丸である授業内容の改善を通して学生の勉学生生活を支援しようという趣旨で提案している。中でもその中核をなすFD活動に、これまでの内容に加えてどのような要素を付加すれば、その本来の趣旨を具体化出来るのか、その可能性を追求し、提案しようという野心的な内容になっていると認識している。もしこの難しい試みが奏功すれば、学生の学びの質を向上させようとする教育改革の流れの中で、全国的にも大きなインパクトをもたらすであろうと考えている。

申請書に示された図については、広報課の片庭美咲氏の手を煩わせました。無理な注文をなんなくこなしていただいたことに感謝しています。全体のレイアウトについては、やはり広報課の赤羽研太氏のお力添えをいただきました。また申請内容をつぶさに読んで、的確なコメントを下された総務課の松田千寿子氏や、貴重なアドバイスをいただいた糸井重夫教授にも記して感謝します。

1. 学生支援に対する現在の基本的考え方等について

(1) 学生支援に対する理念や目標について

学生の支援を考えるにはまず、①入学してくる学生が現在どのような状況におかれているのかをよく分析することが必要です。そして次に、②どのような原因でそうした状況になっているのかを深く考えてみる必要があります。また、③そのような周囲の環境や社会的状況が、こういった形で学生の「こころ」や「行動様式」に影響を与え、現象として具体的に表れて来ているのかを、表面的な部分だけではなく、背景まで含めて良く見る必要があります(3(1)(a)の図2も参照)。

(a) 学生支援の目的

松本大学松商短期大学部では、このような認識の下で、学生のニーズをとらえた数々の、学生生活を支援する取組を行ってきています(3(2)参照)。学生に必要なとされる内容(教員サイドからの視点)、或いは学生の要求(学生サイドからの視点)は、多方面に渡っています。しかしその多くの目的は、学生が社会へ出るためにどうしても通過しなければいけないプロセス、つまり自分自身で判断し、責任を持って実行していくという当たり前のプロセスを完遂させる力をつけることです。しかしこれがなかなか難しいのです。こうした学生に、①仕事遂行能力を示すための資格取得をはじめ、②社会人として必要な教養・社会性の獲得、③周りの異なる世代の方々とコミュニケーションを行って意思疎通を図り、④相互に理解しながら協力して一つの仕事を完成する、このような社会人として当然の資質を付加価値として付ける、このために必要な支援を行おうとしているのです。①が必要条件とすれば、②～④は十分条件に対応するでしょう。こうした必要かつ十分な条件を学生に備えさせる、これが松商短期大学部が学生支援を行う目的となっています。

(b) 学生支援に対する理念 -CS(顧客満足)から協働(学生参画)へ-

(ア) 現状認識

松商短期大学部をはじめ多くの大学では、学生に対してこれでもかというほど多くの施策を行ってきているように思えます。しかも「未だ満足できないなら、これも」というような方向でサービスをエスカレートさせているのではないのでしょうか。しかしこうした事態は、学生は2年間で短期大学を通過していく単なるカスタマーとする見方に起因していると思われれます。大学が持っている多くの機能を駆使し、お客様の満足度(CS)をできる限り上げることによって、学生が育っていたと思込んでいる節があるのではないのでしょうか。しかし、文部科学省をはじめ社会の反応は、今でも多くの大学に多様なGPの獲得を目指すように競わせています。これはなぜでしょう。まだまだ学生の育ち方が不十分だという認識からだとしか思えません。

(イ) 学生の大学運営への参画 -カスタマーからコラボレーターへ-

そこで松商短期大学部では、これまでの「CSを上昇させればいい」という姿勢を改めて、学生を大学運営のカスタマーからコラボレーターへと、その認識を変化させようと考えています。教職員と共同で大学運営の一翼を担うとなれば、責任が伴うだけでなく、「本当に実現したい自分達の要求とは一体何なのか」についても考えることになるでしょう。

(ウ) FD活動を例にとって理念を示す

例えばFD活動にしても、これまでアンケートをとって集計し、もし評価が芳しくないなら教員はその結果にちょっと不満を抱き、愚痴をこぼしながらも学生のニーズを付度し、次年度には「これでどうだ」と新たな試みを取り入れて授業を行う。しかし学年の異なった学生には「まだまだです、良く分からない授業だ」と突き返される。それで「もうどうして良いか分からない」といった状況は、よく見かける風景ではないのでしょうか。そうだからといって、強圧的に出ても、当初目標通りに学生が変化するわけではありません。こうした状況を本気で変えていくことこそが、本来のFD活動であるはずで

そこで、学生と共に良い授業とは何かを議論し、創り上げていこうとするのです。狙いはFD活動の実質化です。その目指す結論は、実はもう分かっているのです。「教員の情熱と学生の学ぶ熱意のないところで、良い授業が成立するわけが無い」という冷厳な真実です。松商短期大学部では「教員の熱意」の存在を大前提とできる状況にありますので、学生が大学運営に参画する中で、互いが本音で話し合っ、協働でよい授業を創り上げていく可能性を持っています。「教員の熱意」は時として空回っていることもあるはずですが、そこで当初は感情的になってしまうことも予想されますが、学長などのリーダーシップで学生教職員の共通目標の達成という一点に収束させるためのルールを敷いていこうとしています。こうした考えが、本取組における松商短大部の学生支援の理念となっています。

(エ) 身に付く社会性 - 学生参画のもう一つのねらい -

学生をカスタマーとみなす一方的なサービス提供から、コラボレーターとみなし、大学の運営を教職員と学生という異なる視点を融合させ、有効な大学運営の方策を協働で探るという方向への転換を試みる訳です。これは例えばFD活動を意義あるものとするための一方策です。しかし、学生参画にはもう一つの効用が考えられます。

大学を比較的同質性を保った一つの小さな社会であると考えれば、学生がその運営に参画することにより、大学は一般社会へ出るために必要な種々の能力を獲得する訓練の場になると考えられます。自らの置かれている立場を客観的に見る、課題解決に必要な手立てを多くの学生の意向を汲み上げながら考える、教職員などとコミュニケーションができる、決めた事は責任を持って実行する、成功度をチェックし次に備えるなどが、日常の学生生活の中で体得できる可能性を持っているのです。

(2) 学生支援に対する現在の取組の組織性について

(a) トータルな学生支援システムの構築 - 現在の支援状況 -

現在の松本大学松商短期大学部の学生支援は、社会の複雑性を反映して、学生の抱える問題に応じ多岐に渡りますが、それぞれに木目細かく取り組まれています。勉学活動等の学習関係では教務委員会、自主的活動を含む学生生活関係では学生委員会、就職活動関係ではキャリアセンターの教職員が対応しています。全学必修のゼミナール担当教員がそれらを結び付ける形で組織の要になり(次図参照)、学生には、伝統的に痒いところに手が届く支援が来ています。その結果は、退学率の低さ(楽しく学べる環境と学生・教職員の距離の近さ故の気軽な相談体制)、就職率の高さ(指導の充実・学習の成果と社会性の涵養)、好調な学生募集(魅力あるカリキュラム等)等の指標に顕著に表れています。

(b) 学友会の組織活動を支援する体制

支援の取組の中では、学生の自主性を引き出し、自らの責任で企画を立案・実行し、成功させる事の重要性を認識しており、このような活動を担う学友会活動を積極的に支援しています。学生が社会性をなかなか持てない中で、本学では学生社会を運営する組織である、学友会活動の活性化を重視しているのです。学友会活動は、全学生を対象として、独自の財源も持ちながら、自分達で予算的裏づけを持った計画を立て、それを着実に実行していくものです。小さいといえども学生の社会生活(大学生活)を運営していくのですから、学友会活動を推進するには、コミュニケーション能力、自己表現力と説明能力、他者への共感・理解など、現在の学生に欠けていると思われる様々な力が要求されてきます。つまり、そこは学生の社会性が涵養される場として、教育的にも軽視できないフィールドとなり得るのです。このような統一した認識を共有できているため、教職員の学友会活動を軸とした学生支援は、全学挙げての組織だった本格的なものになっています。

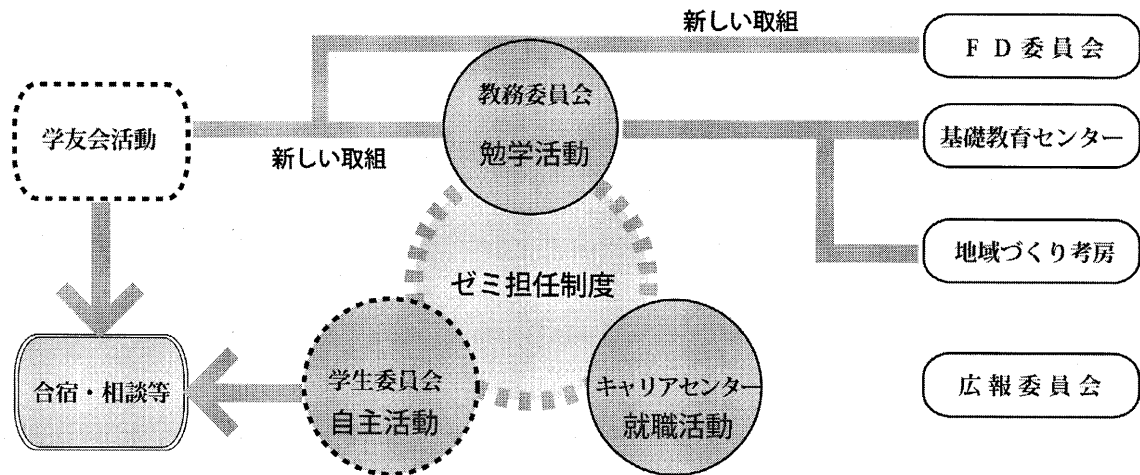


図1. ゼミナールを中心に組織化された学生支援体制

このような組織的な活動が実行できるためには、ゼミナールやサークルの基礎組織を単位として意見を汲み上げ、異なる意見と日程を調整し、財源も調整しながらの粘り強さが必要です。擬似社会体験としての学友会運営は、なかなか自分の思い通りにはならない経験、他者と意思疎通を図る必要性、学外の団体との交渉・折衝など、ストレスを感じながらの生きた経験をできる場となっています。

学友会活動を教職員が、学生委員、ゼミナール担当、クラブ活動顧問などいろいろな立場から側面支援する中で、学生との信頼関係に基づき意見を交わすことができる雰囲気が作り出されており、学生からの本音の情報を得られる場となっている点は重要です。

(3) 社会的ニーズや学生のニーズへの対応の現状について

(a) 社会的ニーズと大学のニーズとの融合

本学では、地域社会との連携を取り入れた教育手法を駆使していますが、この取組は第一回の特徴GPにも採択されています。これ自体は、学生の学びの動機付け、学習意欲の向上を目指して行っているものです。しかし地域の側から見ると、高齢化が進行する社会にあって、若者の参加が必要とされる場面が増えているので、地域に賑やかさを取り戻すなど地域活性化への貢献ともなっています。

学生の学びの視点で考えてみると、学内での理論的な講義だけでは理解が難しい場合でも、学外へ出て現場での実態を経験する中で、課題や問題点が見えてきます。さらに、教室で学んでいることが実社会ではどのように展開しているかが直接見えるので、学生にはこの手法は好感を持って受け入れられているようです。インターンシップはその場が企業ということになりますが、本学の場合は地域社会全体を学びの場と捉えているのです。

(b) 学生のニーズの実現のために

また社会的には、孤独化が進む中でも、学生はそれを乗り越えて仲間と共に楽しみながら大学生活を送りたいと望んでいます。また教職員からも専門分野の知見だけではなく、社会人の先輩として、これからの社会生活を送る上でよきアドバイスを得たいと考えているでしょう。これが本学教職員の底流に流れる学生への認識であり、学生の立場に立って支援できる源泉となっています。そういった学生のニーズ（彼等の意識が顕在化しているかどうかには依らない）を実現するために、例えば学生委員会では、学友会の年間活動方針案作りやそれを財政的に裏付ける予算案の作成への支援をしています。学生委員は、そのこと自体を委員会の任務と位置付け、全教職員と協力して組

織的な対応をしています。

(4) 現在の学生支援を行う教職員の資質向上（ファカルティ・ディベロップメント（FD）、 スタッフ・ディベロップメント（SD）など）について

本学ではFD委員会を立ち上げ、学生に対して授業評価を求める事はもちろんですが、教職員は泊りがけで経験交流会を開催したり、学外から講師を招いて学習会を催すなど、比較的積極的なFD活動を展開してきています。

(a) 学生支援の重要性を教職員の共通認識に

教員の大学での任務は、教育・研究活動、社会貢献、大学運営という3本柱からなっているという認識から全ては始まっています。その中の教育活動の一つとして、優れた授業を行うことと同様に、学生生活を様々な面から支援していく事も含まれています。専任の教員は全員必修のゼミナールを担当しており、専門分野の教育内容については独自性が発揮されますが、それ以外の点では歩調を合わせて進めていくことが数多くあります。どの教員も例外なく学生対応しているという意味では、組織を挙げた取組となっているのです。

このような姿勢を大学が採っていることから「教職員と学生との距離が近く、面倒見の良いしかも就職に強い短大」として、地域社会からの熱い視線を受けてきています。新しく入って来る教職員に対しても、このような姿勢が重要なのだという意識を持ってもらえることが、先ず第一の資質向上策となります。これは、本学教職員の日常的に発する言葉や振舞いから、徐々に周囲に浸透していっていると思われま

(b) 教職員の能力アップへの取組（特にSDについて）

職員も各種研修会に派遣し、各部署において求められる職員像を鮮明にしながらその能力アップの取組にも力を入れています。例えば就職相談や学生相談など学生との対応を主とする職員には、カウンセリングやコーチングスキルさらにはEQのプロファイラーなどの資格取得を支援しています。さらに、メンタルな部分を含む学生相談にはその専門技術をもっている職員を採用するなどの対応も行っています。教員には特段の資格取得を要請はしていませんが、前項で述べたように、学生対応することが主要任務の一つであるという認識を共有できるようなシステムになっています。

毎日の朝礼における、当日の行事日程の確認は当然ですが、一日一人のペースでテーマは自由の3分間スピーチを課し、短時間での確に話せる訓練を実施しています。月一度の全職員参加の定例職員会議を開き（必要に応じて課長会議も実施）、職員間の横の連携を深めようとしたり、本学教員の動きや全国の大学の状況なども学ぶようにしています。

(c) FDについて

FD委員会、全学FD委員会などを設け、授業評価のほかに学内外の優れた実践を学ぶ学習会なども開催しています。もちろん「わかりやすい授業を目指して」というFD活動報告書も出版しています。しかし、2(1)(a)(ウ)にも述べたように、形式的な要件は満足していても、改善するかしないか、出来るか出来ないかなどは、最終的には教員本人の自覚的な取り組みに任されており、問題を指摘された教員に対して助言を与えられるような専門家がおかれているのではありません。教員自身のプライドもあり、教職員間でのフランクな話し合いが持てるかどうかは鍵であろうし、教職員の誰もが気が付かない鋭い指摘は、当の学生に語ってもらうことが重要な要素であると認識しています。

(5) 現在の取組の実施後の評価及び取組内容の改善について

(a) 評価を広く世に仰ぐ姿勢と指標の設定

学生支援活動の評価は、年間活動の総括的文書を、文字通り毎年「「アニュアル・レポート」としてまとめ、学内外の目に触れるようにしています。地域総合研究という雑誌に掲載し、公刊されるので、大学関係者等にはいつでも公開されています。この意味では全国的に評価を仰ぐ姿勢を示しているとも言えます。公表内容は、3本柱の全ての活動内容やそれをサポートする各種委員会の実績など、大学システムのあり方全般に渡っており、自己点検・評価報告書の基本となりうるものになっています。例えば学生委員会関係では、クラブ活動の遠征やそれへの指導者の引率などの経過なども詳細に報告され、成績を含む成果についても分かるようになっています。

また、キャリアセンターや学生委員会の学生支援活動およびゼミナールを中心とした担任制度などは、長い歴史と経験を経てきていますが、これらは就職率の高さ(>96%)や退学率の低さ(<2%)などという指標で見ても、十分な成果をあげてきていると評価できます。

(b) 十分な成果が得られていない取組と改善の工夫

本学の比較的新しいシステムに、学生に基礎学力をつけることを目的とした「基礎教育センター」がありますが、ここを利用する学生数が思ったほどは伸びていないという問題があります。生活相談ではなく、勉学生活上の相談、或いは質問を受け付ける場所という位置付けですが、担当教員と接するのは「社会教養」という基礎学力を伸ばし就職試験に対応できるようにと設けられた必修授業の他は、教養系の選択科目に限られるところに問題があるのかもしれませんが。そこで、本学学生の実力に見合った、自習用の問題も織り込んだテキストを創り、それをを用いて少なくとも月二回はセンターへ行き、質問・懇談することを課して、担当教員とのコミュニケーションを図れる工夫をしようと考えています。ゲーム感覚で自習が出来るソフトも流通しており、その利用も考えてみようとしています。また大量のサポート（約20名規模の教育支援者）に来ていただき、一人当りの学生数を極端に少なくして、どの学生もこのセンターに通うことで、自分で或いは授業で学ぶ時に出てきた不明な点についての解説やより基本からの説明を、自分に合うように（オーダーメイドで）受け付けてもらえる場所である、ということを周知させようと考えています。

2. 学生支援に対する現在の基本的な取組の状況について

(1) 現在の取組の状況 - 入学から卒業までを通じた総合的視点で -

(a) 総合的な学生支援の取組

最初にも述べた通り、本学学生の置かれている社会状況を見た上で、それらに意識的であろうと無意識であろうと影響を受けた結果、彼らが現在抱えている問題を導出してみます。そのように認識された課題に対して、有効に働くであろうと思われる対策を講じるべく、学生支援の活動に総合的に取り組んでいます。その概要が次図に示されています。

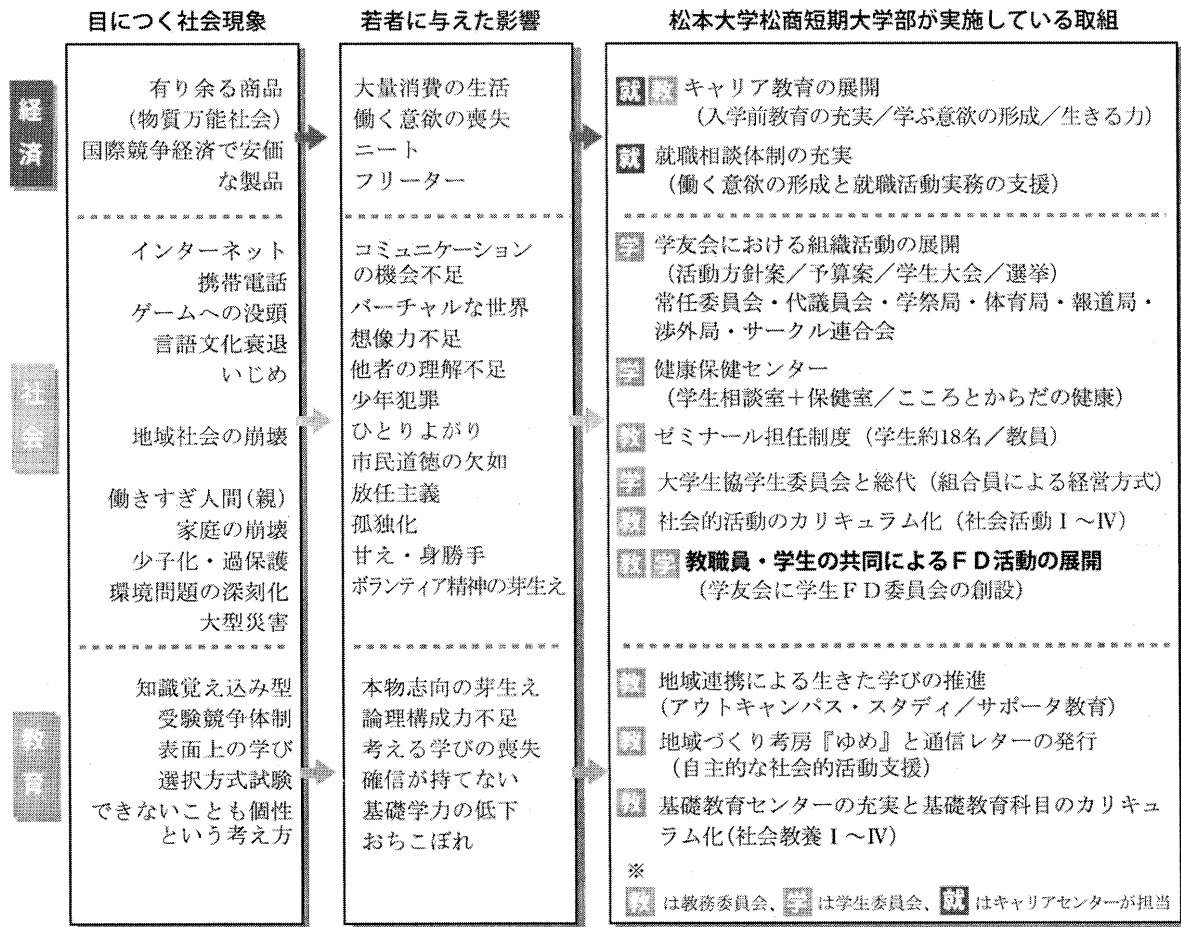


図2. 本学の学生支援の取組とその背景

教務委員会、学生委員会、キャリアセンターなどが取り組む活動は、全て学生の自主性を育み、取組の中で、対話力(コミュニケーション、プレゼンテーション能力)、判断力、協調性、市民道徳の育成等、社会性の涵養を目指す方向に収斂しています。

(b) 時系列で見た学生支援の取組とその構成

入学前から卒業までの時系列で、本学の取組がどう構成されているかを概観して見ます。

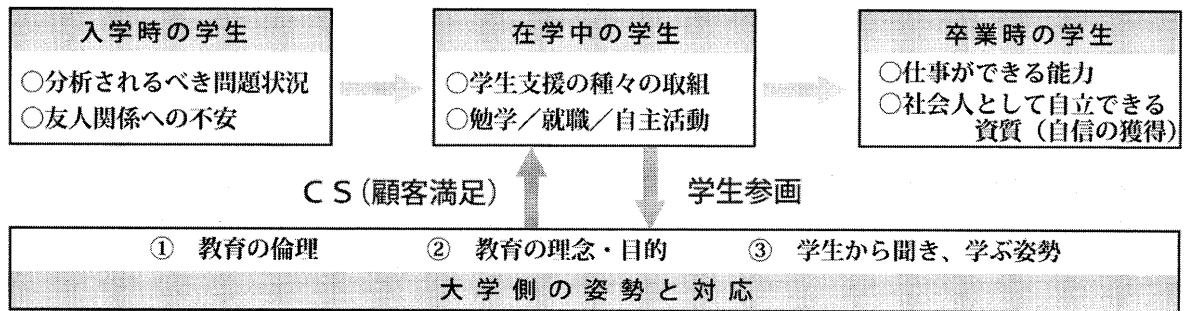


図3. 学生支援に対する松商短大部の考え方と時系列で見た概要 (詳細は資料1の図参照)

(2) 現在の取組の連携状況 —総合的・体系的取組の視点—

(a) 取組項目ごとの支援状況

(ア) 修学支援 **教**

本学はフィールド・ユニット制度という、多様な分野の中から学生の好みに応じて選択できる学習システムを採っています。適切な指導がないと、学生はあれこれ目移りして、系統的な履修ができなくなる可能性があります。そこで、キャリアセンターとも連携し、学生夫々の将来の進路を確かめながら、入学前からオリエンテーションを実施しています。

キャリアカウンセリングにおける在学生の経験談も、入学予定者には大いに参考になっています(資料2)。入学後もクラス担任制度(図1)を利用し、学生一人一人の相談に応じています。さらに、入学式の翌日から実施される新入生合宿では、教務委員会からの懇切丁寧な履修ガイダンスが行われます。本学では委員会、クラス担任、在学生など何重にも仕組みられた支援システムを構築して対応しています。入学後も出欠調査を行い、クラス担任と連携をとりながら、欠席が少しでも目立つ学生を知らせ、適切な対応をとっています。

(イ) 学生相談 **学**

県医師会の紹介で、大学近隣の医師を指定していただき、学校医登録をしています。学生の健康診断や今回のほしかのような場合にも、相談に応じていただける体制ができています。学内にも医師や看護師の資格を持つ教員がおり、通常の対応には困りません。また松本市は緊急医療体制も整っており、現在のところ特段の心配はないと思っています。

(ウ) 健康支援・メンタルヘルス支援 **学**

健康保健センター(保健室、なんでも相談室から構成)を設立し、風邪や腹痛、軽い怪我などには適宜対応しています。少し重い症状には学校医などとの連携を利用しています。

またなんでも相談室にはメンタルヘルスを専門にする職員を配置し、精神保健福祉士や医療ソーシャルワーカーの資格を持つ教員と連携して、学生の相談に常時当たっています。

(エ) 就職支援 **就・学**

就職活動を支援するのは主にキャリアセンターの役割です。学生を社会へ送り出すには、社会常識・一般教養の涵養だけでなく入社試験への対策も必要になって来ます。さらにその前提として、各学生が自らの人生をどのように設計するかを考えるプロセスを経る必要があります。このため、キャリアカウンセリングを入学前、就職活動が最盛期を迎える前の1年次の春休みなどを利用して、学生全員を対象に、一人約一時間をかけて複数回、丁寧に行います。これまでの経歴などを振り返りつつ、興味や適性をもとに、将来の可能性を探るという作業を集中してやり遂げます。その手伝

いを大学側が用意しています。

職業の実態を知ろうと、企業の方を招いての就職講演会や、OB・OG、就職先が決まった先輩の経験談を聞く会(資料3)も含め、具体的イメージが湧く企画も用意しています。

教務委員会との連携も進み、就職指導が時間割上に配置されています。基礎学力の養成は就職試験対策にもなりますが、社会教養Ⅰ～Ⅳという科目では、国、数、英、社と時事問題、必要な学生には理科も用意し、全学生が学べます。同時に基礎教育センターを開設し、現在は常時4名の専任教員が学生の質問に答えています。センターでは、本学学生に合わせたテキストの開発も手がけています。他にも「新聞を読む」「文章表現」等の科目で、時事問題への関心を高めたり、文字での表現能力を高めるための対策も行っています。

(オ) 経済的支援 教・学

バブル崩壊以降、倒産、リストラなどで勉学を続けるには経済的に困難を抱える家庭が増加してきました。そこで、平成13年度から、経済的理由を指標とする特待生入試を実施しています。志願者数の増加に伴い、「授業料全額免除のⅠ種」の他に「半額免除のⅡ種」も設け、できるだけ多くの学生が入学できる措置を講じています。また、同窓会の支援により、授業料を就職後に返還する(無利子)ことが前提の貸出制度も作っています。これに旧来からの育英奨学金を含め、本学の経済的支援のシステムが構築されています。

また勉学意欲を高め奨励する意味で、学生が各種資格取得に成功した場合に、表彰し受験料に見合った支援金を支給しています。これは後援会(保護者会)のご理解を得て、その会費からの支出をお願いしています。この制度で6年経過し、資格取得に挑戦する学生数は上昇を続け、合格者数も増加しており、良い教育効果に保護者からも喜ばれています。

(カ) 課外活動支援 教・学

課外活動の支援については、本学は長年の実績を誇り、その取組は論文として紹介されています。学友会活動の支援は別に紹介するので、ここではそれ以外について述べます。

まず、学生が自身でプランを立て、地域社会と連携して様々な取り組みを行うことを奨励するために、地域づくり考房『ゆめ』を開設しました。専任教員と非常勤職員が常駐し、地域社会からの要請に応じて学生が地域住民と話し合います。教職員はアドバイザー役を果たします。これとは別に学生が独自に考えた地域連携事業を公募し、「優秀で且つ実現可能性があり、興味深い内容」を選定し、上限5万円程度の支援をする制度も創りました。

他大学との交流活動に対する支援も行っています。クラブ活動には規定を設け、一定水準以上の大会への出場については、適当な補助を行うようにしています。また県内の大学・短大・専門学校が集まり交流する「虹色フェスティバル」(本学学生の発案で始まった)が、毎年本学を会場に行われ今年5回目を迎えます。また、短大同士で行っている相互点検・評価活動の一環としての、学生間交流も活発です。こうした活動には、移動を伴う大学間交流が付いて回るので、大学としても支援の対象として、大いに奨励しています。

同窓会では、学生の自主的活動で、特に顕著な実績を挙げた学生達を卒業時に表彰する制度が設けられ、これを「同窓会賞」と呼んでいます。この賞も励みになり、学生の活動はかなり活発に展開されています。しかし、その大元には学生委員会による、学友会執行部への、粘り強くかつ節度をわきまえた支援活動があります。

(キ) 学生生活上の支援 総務

大学生生活協同組合との連携を強めており、下宿は殆ど全ての学生が生協を通して決めています。消費者被害対策は、学生委員会主催で地元の弁護士等を招き、被害の実態や程度、対策法など現場

感覚のリアリティ溢れる講話をしていただいています。また、免許を取得したばかりの学生も多く、警察署の協力を仰ぎ、安全運転の講習会も開催しています。

後援会の協力で、安価なものですが、全学生が保険に加入するようになっており、通学途中やアウトキャンパスでの実習時における怪我などに対応できるようにしています。

(ク) 留学生への支援 国際

留学生の数は、各学年5名程度で、割合で見ても2%弱でしかありません。四大とも共通の国際交流センターが開設され、留学生支援を行っています。困ったときは、ゼミ担当または国際交流センター員というように、留学生の心のよりどころとなっています。また日本人学生が留学生と話そうとしないという問題もあったので、留学生をチューターとするハングル語や中国語講座を設定し、その中で交流の場が出来るように試みています。

また近隣には観光地も多く、パンフレットのハングル・中国語版も必要です。母国語のパンフレット作り等で地域社会に協力することで、留学生には日本文化や日本語の生きた学習の機会を提供しています。さらにスキー研修会を催したり、他大学の留学生と交流する機会も増やしています。「留学生会」をつくり、その自主的活動も支援しています。

留学生への経済的支援を目的とした取組にも参加させています。中でも地元ロータリークラブが主催する日本語スピーチコンテストに例年参加しており、地元CATVの放映もある中で、奨学金を副賞とする最優秀賞を獲得するにまで至っています。

(ケ) 障害のある学生への支援 学

本学ではユニバーサルデザイン(UD)という考えを取り入れようとしています。古い建物は、UDどころかバリアフリーにも対応できていない箇所が多くあります。新館での工夫を利用して何とか対応しているのが実情です。しかし、福祉の心や人を思いやる心の育成には力を入れており、障害を持っている学生に付き添いながら面倒を見る学生が、いつでも出現できる雰囲気づくり、つまり「こころのUD化」を心掛けています。

(b) 取り組みの連携と支援の体系

これまでさまざまな項目について、それぞれの具体的な支援内容を紹介してきました。ここではこれらの支援活動の、委員会を中心とした体系について示しておきます。

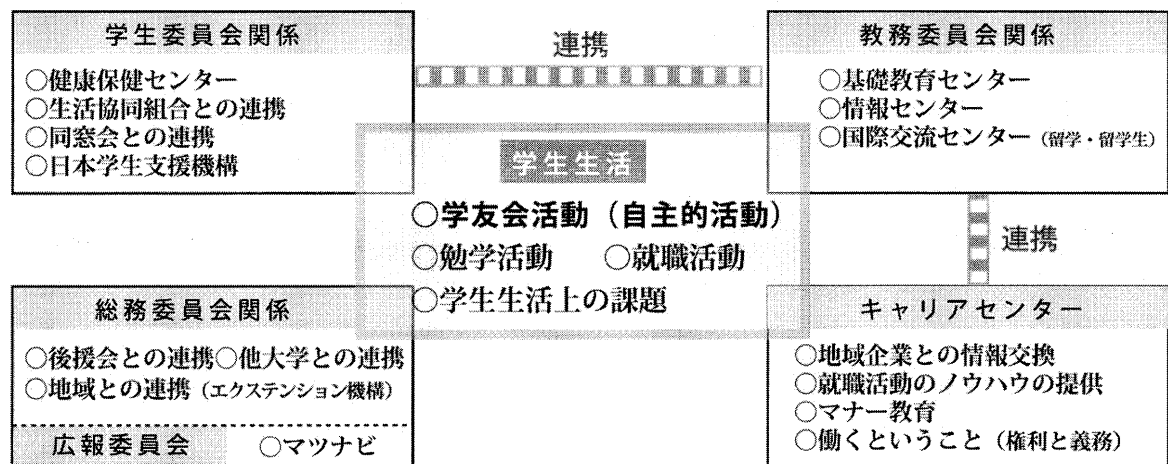


図4. 学生生活の課題と対応する委員会中心の大学組織

(c) 学友会の組織的活動への学生委員会の支援体制

学生を代表する自治組織である学友会は、次図に示す組織体制を持っています。全学生が所属するゼミを基盤にして、ゼミを代表する学友会役員が選出され、その互選で各局の代表役員（常任委員となる）が選出されます。各局が担当する内容は毎年改善が加えられ進化しています。これとは別に全学選挙で常任委員会四役8名が選出され、総勢40名弱の常任委員会という執行部を構成しています。この中にはサークルを基盤として選出された部長や会計等から構成されるサークル連合会有り、ここから3名の役員（常任委員）が入ります。

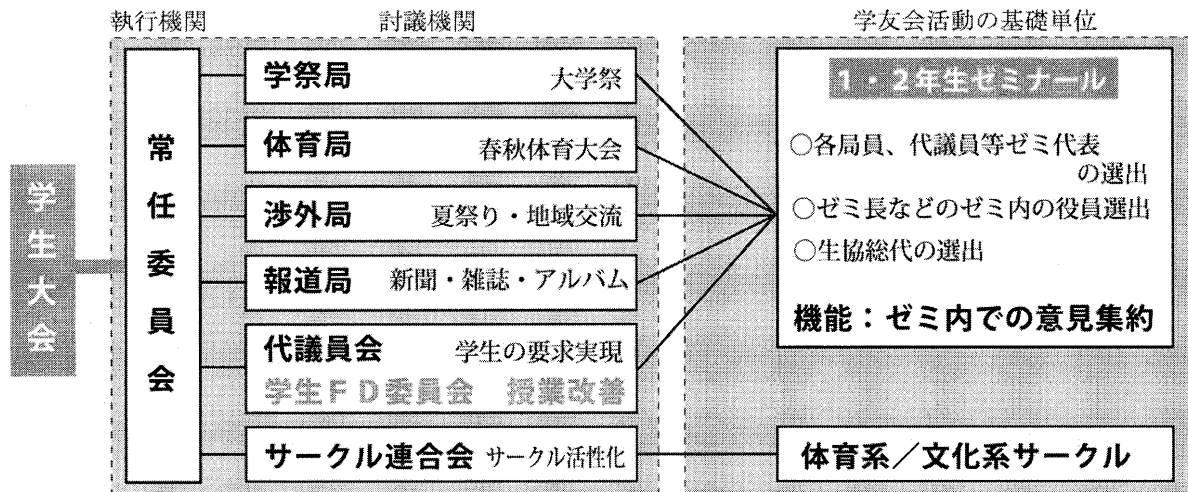


図5. 学友会常任委員会の組織図と学友会の組織的活動の源泉

各局がそれぞれの一年間の活動方針とそれを裏付ける予算案を立てます。そのため年末にはゼミ選出の全局員を集め、各局毎に会議を開き方針が討議され決められます。年明けには各局代表と四役からなる常任委員会の会議（リーダーズ・キャンプ）を開いています。各部署から持ち寄られた方針案を全体で討議し、予算も収入を勘案しながら調整されます。どうしても実施したい内容が予算面で衝突する時は、激しい議論になることもしばしばです。また、新規の事業を行う場合は、このキャンプで担当する部署が割り振られますが、代議員会（学生の要求をまとめ大学側と交渉する部署）が請け負うことも多い。

この討議が終わり予算も含めて話がまとまれば、それが向こう一年間の活動方針案と予算案になります。これらの案は冊子となり、1年生には3月、新1年生には4月に四役や各局長から説明され了承を得ます。この了承を得る会は学生大会と位置づけられています。

こうした組織的な活動を支えているのが、常任委員会や各局会議、或いはリーダーズ・キャンプでの学生委員会からのアドバイスです。年末に行われる各局の会議では、活動を終えたばかりの2年生も応援に入り、活動の成果と問題点を示しアドバイスしています。本学では「学生の自主性にだけ任せ、教職員は何もせず見ている」という姿勢はとっていません。学生の現状を分析した結果、教職員も学生と共に考え、その中で社会性を身に付けられるように支援したり、自らを客観化できる力、異なる意見を許容できる力、ファシリテーション能力などを身に付けさせようと考えています。昨今の小グループ化した学生を相手に、協調性を発揮し、コミュニケーションやプレゼンテーション能力に長けた学生を輩出できる"からくり"には、この学友会活動を通じた取組の功績も大と思われる。

3. 社会的ニーズ等に対応し、特段の工夫などが行われ、著しい効果が期待される新たな取組（経費補助の対象）

(1) 新たな取組の趣旨・目的

(a) 動機や背景 — 受動から能動へ、これまでの実績を根拠に —

これまで見たように、本学は数多くの学生支援の取組を行い、それなりの成果を挙げてきています。しかしその多くは大学側から提供されたアイデアあるいは企画に対し、学生はそれを適宜判断して、利用するしないを決めるという、どちらかという受身的な立場にいたと思われます（図6左）。現在多くの大学は、ポピュリズムというか学生募集を成功裏に進めたいのか、学生の側に負荷をかけない方向を採用しているようです。それで当初目標を達成できたり、多いなる前進が出来ているならいいのですが、いつまでも似た内容が教育のテーマとして掲げられ、大学に更なる改善を求めている事からも、必ずしも上手くいっていないという根深い認識が、大学を外から見ている側にはあると思われます。

こうしたことを背景に、何とか学生自身が受身ではなく能動的な姿勢を採りながら、本来の社会性を獲得できないかを探ろうとして、新しい取組に挑戦しようと考えているに至っています（図6右）。特に大学生生活の本丸である勉学生活に切り込んで、FD活動をテーマとしてこの取組を追求したい。幸いな事に、広報活動、キャリアカウンセリングを含む就職活動等では在学中の先輩や卒業生が教職員と共に、自分達の立場から、積極的な役割を果たす事例を積み上げてきています（資料2～4）。学友会活動では学生との協働関係が上手く作動しています。このような信頼関係を築いてきた経緯が背景にあるからこそ、勝算を持って挑戦できると考えています。成功すれば全国への普及も可能かもしれません。

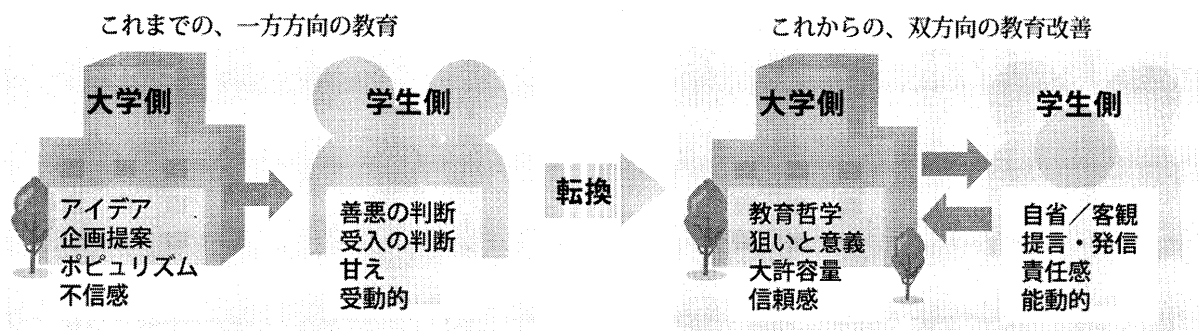


図6. 新しい取組に求められる姿勢の転換

(b) 取組の持つ意義

(ア) 学生の意見を直接反映させる大学運営 — 協働の姿勢 —

松本大学松商短期大学部として様々な課題に取り組んでいますが、その有効性については、大学側からの視点で点検・評価活動を行っているに過ぎません。例えばFD活動においても、授業の終了後に、自由記述欄を含むアンケート調査を行って、それを教員個人が、あるいは教員組織が、どのように結果を解釈すべきかなどと、四苦八苦しているのが現状です。換言すれば、学生の意見を間接的に尋ね、その結果を教職員なりに解釈して、再び学生に「これではどうでしょうか？」と投げ返しているという構図になるでしょう。

本取組では学生から直接、学生が感じている問題点を聞き出し、直接の話し合いを通じて最も有効な教育手法や支援システムを協働して探ろうとしています（図7参照）。当初は教職員側の数を少なくし（FD委員や管理職のみ等）、学生側の数を多くしないと、なかなか本音は引き出せない

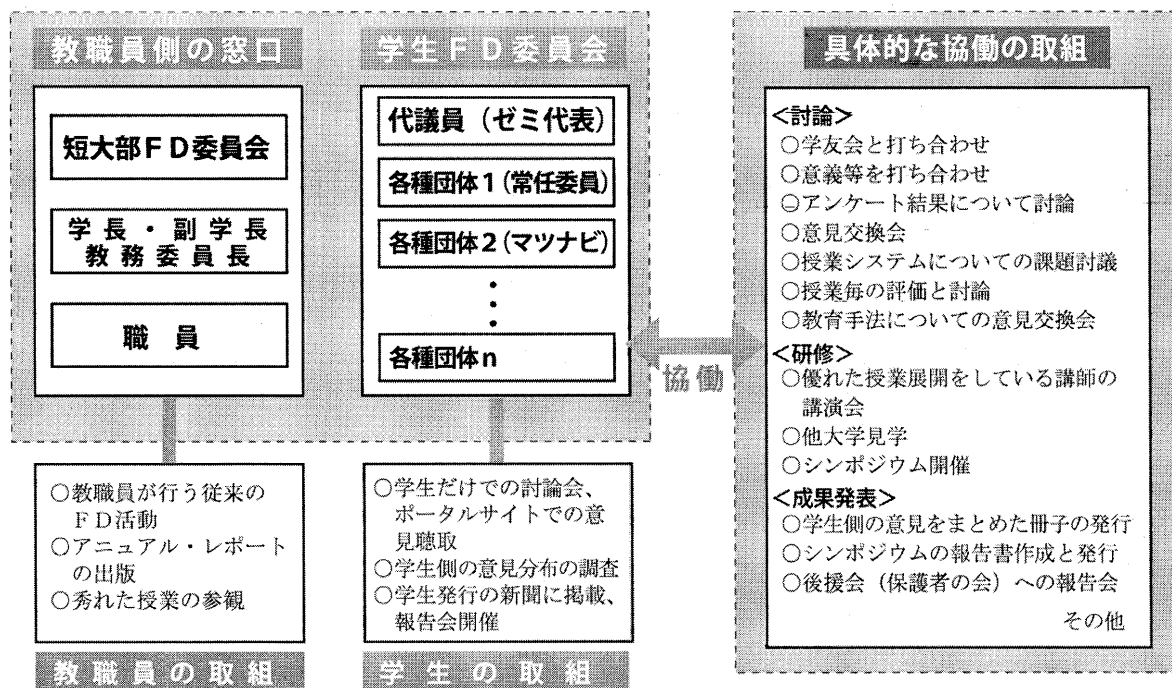


図7. 学生FD委員会と教職員との協働の取組の概念図

でしょう。価値観を「教員の授業が良いとか悪いとかの判断ではなく、どこをどうすれば学生に魅力ある授業に変えていくことが可能か」に置くことを、どこまで教職員・学生に徹底できるか。取組の成否は、この点にかかっていると思います。

(イ) 勉学意欲を引き出す活動

学生がFD活動に参画する事で、自らの大学生活へのかかわり方を見直すきっかけにできると考えています。常に大学側から投げかけられ、それに対し教職員の顔色を見ながら、あれこれ探る時代はもう終焉を迎えています。優れた教育は「教える側の情熱と学ぶ側の意欲の融合」によるのみ成り立つのは、古今東西の真実ではないかと思われまます。

一方で「最近の学生はやる気がないから」といって「研究のみに走り、自らの教育への情熱の喪失を隠そうとする」実態や、「教員は何を言っているのか分からない」といって教員の所為だけにしまい、「自ら学ぶ姿勢を見せない言い訳に利用しようとする」実態に切り込まないで、教育改善に実を挙げようなどというのは、馬鹿げた妄想にしか過ぎないことは、これらとは正反対の幾多の素晴らしい教育の取組が証明しています。

本取組は、教職員と学生の間で緊張感のあるやり取りを通じて、相互理解を進め共に前向きに、学生にとっても意味のある改善策を探ろうとするものであると考えています。

(ウ) 他者の目を意識させる活動

さらに副産物として、学生には自分達と異なる立場の者(教職員)が何をどう考えているのか(本音)を知る場となるので、自らを客観視する姿勢を身に付ける訓練の場になるでしょう。教員の側から授業に対する考え方が語られるので、それを受けて逆に自分の要望を出そうとする時、どのような根拠に基づいているのかを自分自身で考えざるを得ません。このやりとりがどこまで出来るかが成否のポイントですが、本学のこれまでの取組を担保として挑戦しようとしています。学生の側から見れば、少しプレッシャーを感じるでしょうが、率直な話し合いが実のある成果へつながらる過程を見ることが出来れば(主に教員側の努力に依る)、学生自身の成長にも目を見張るものが

あるだろうと思っています。

(エ) 学友会活動の拡張 ー代議員会に学生FD委員会を設けるー

これまでも学友会活動の学生に対する教育的効果に注目して、それを支援する活動を行ってきています。この観点から本取組を眺めると、学生の自主的な活動の中に、勉学に対する要望を実現するための活動を組み込むということになります。それは学生FD委員会と称するのが妥当だと思われる学生組織です。他の局のような企画・イベントを実行していくものとは違っていますので、代議員会の中にFDという特別な任務を持ったグループとして設置するのが良さそうです(図5参照)。もちろん学生の中にも多様な意見が存在するのは当然です。あまり勉強したくないから、いい加減な授業でも単位さえもらえれば、いい授業と判断したいと言う者もいるでしょう。知的好奇心をくすぐる授業を求める学生もいるでしょう。本音で喋れば、こうした実態を明らかに出来ます。しかし本当のFDはここからです。あまり勉強をしたくないのはなぜかという問いかけが必要です。学生個人にのみ還元できない要素があるかもしれません。授業料を払うためにアルバイトが欠かせないので、学習に時間をかける余裕がなく、そこそこでOKが出ないといけないということかも知れません。このような意見は紙のアンケートだけでは出てこないでしょう。少なくともある種の信頼関係がなければ、なかなか上手くはいかない筈です。

(c) 取組の意義・意図を先取りしている2つの例

最も難しいと思われるFD活動への学生参画の前に、既に学生が大学運営に部分的に携わっている例が見られますので、それを紹介し学生参画のイメージを持っていただきたい。

(ア) 広報活動への学生参画(マツナビ) ー入学前教育を兼ねてー

いまやどの大学でも、高校生やその保護者を対象に、キャンパス見学会などと称した学生募集の説明会を開催しています。その目的には教育内容を理解してもらった上で、受験に結び付けたいという教育的配慮があります。しかし受験を希望する学生は、自分が入学したときの学園生活を具体的に描きたいと思っています。この場合、教育内容は教員が説明するのが相応しいでしょうが、学園生活や教育内容の受け止め方は、当の学生の意見を聞く方が、高校生にとっては現実感があり、同世代の感覚だからよく理解できるでしょう。このような理由から、在学生が見学会で中心的役割を果たす場合が多くなっており、本学もマツナビと称する学生集団を構成し、その任務を引き受けてもらっています(資料4)。

本学の場合はこれを単なるナビゲータとしてはとらえず、学生目から見た本学の長所や欠点を発見してもらい、それを学生目でどう改善すると良いかを提案してもらおう場でもありと考えています。学生もよく考え、大学のよさを再発見したり、当事者意識を発揮して「このようなことでは、どの学生も満足できない」等と、指摘してくれています。大学運営に直接関わらなければ、当事者意識で眺めることはなく、不満をくすぶらせるか、別の分野に活路を求めていただけかもしれません。例えば最近の四大の例ですが、学生たちが考えて作った「大学生からのちょっといい話」という冊子が、生徒には好評で、知りたいことが良く分かったと人気を博しています(資料5)。短大部もこれに倣う予定です。

(イ) 後輩への就職活動状況の報告

もう一例を挙げてみます。これは就職活動に関する内容です。1年次の春休み、もうすぐ始まる就職活動がどのようなものか不安を抱きつつ、準備に余念のない状況にあります。この時期に、OB・OGの就職活動の体験談や就職した後に「学生時代にやっておいて良かったことや、やっておけば良かったと思うこと」などを話してもらっています。もっと身近な存在である、もうすぐ卒業

する2年生からも、一年前の状況や就職活動の実際など生々しく語ってもらっているのです(資料3)。どこの大学でも行われている取組だと思います。しかしここでも、本学では単なる経験交流会に止めてはいません。先輩達もこのような話をすると決まった時点で、自分なりにまとめその経験がよく伝わるように準備をするはずです。その課程で、本学の就職指導の良かった点やこうした方が良い点なども見えてきて、それをキャリアセンター職員にも伝えてくれています。ここにも学生と教職員が協働で、大学の学生支援システムを改善していくという流れの萌芽が見て取れます。こうした声に依拠すれば、本当に意味のある改善へと結び付くだろうと考えているのです。

以上の2つの例でも分かりますとおり、形式にとらわれず自然体で、「こうあって欲しい」という思いを素直にぶつけ合えば、それが本当の意味での改善につながり、どんな分野であれ学生にとっても有意義な大学生活が送れる下地作りにつながっていくのだろうと思っています。本取組は、このような関係がある程度出来ているからの試みとも言えます。

(2) 新たな取組の独自性(工夫されている内容)

学生を短期大学部2年間で、カスタマーとして通過して行く存在として捉えるのではなく、教職員と同様に大学を構成する一つのセクターとして捉えようとしているのが新しい視点だと思っています。カスタマーとして考えると、大学は単に学生に気に入ってもらえるサービスを次々と考案・提供し、その満足度を上げて卒業させることが主要な任務となるでしょう。しかし、現在学生に社会が期待している内容はもっと深く、広いもので、単なるお客として大学生活を楽しく過ごしているだけでは、身に付かないであろう能力が求められていると思います。それが各種GPなどが設定されている理由でもあるでしょう。

そこで大学を一つのミニ社会と捉え、その主要構成員である学生ももう一つの構成員である教職員と一緒に、自らの社会(大学)を創り上げていくプロセスに参画できるようにしようとする点に独自性があります。学生は在学する大学の全てに満足しているわけではなく、不満があれば改善して欲しいと思うことも多いはずですが、しかし、学生が単なる客であれば大学に個人的な不満をぶつけたりするだけで、必ずしも建設的な方向へとは向かいません。しかし、もし教職員と同様に、自身が学ぶ大学を何とか良くしたいと思うのであれば、教職員(大学によっては「限られた数の」という形容詞が必要かも知れませんが)だけが孤軍奮闘しているよりは、ずっと本質に迫り、意義深い取組が出来ると思います。全構成員による、生活実感に基づいたアイデアの凝縮が行われるのですから。

(3) 新たな取組の有効性(効果)

学生が授業内容や授業のあり方について、自分の要求だけを、その内容に責任を持つこともなく、その意味もよく吟味しないままに言い放ち続けることがいいことだとは思えません。コミュニケーション力や客観的かつ冷静に判断すること、話し相手の立場からも物事を見ることが出来ること(良く聞けること)、こうした姿勢で教職員と一緒に、お互いを理解しながらよりよい授業や大学生活を創り上げていくことが出来れば、大学にとってはもちろん、当の学生も大きな糧を得ることが出来ると予想できます。

もともとは授業改善を目標とするFD活動に連動する取組ですが、そのプロセスでは学生にかかる負荷は想像以上に大きいはずで、これを乗り越える事が出来れば、授業改善を遥かに超え、他の支援活動とも相俟って、学生には余程大きな成果をもたらすことでしょう。つまり、授業内容の改善、FD活動を学生と教職員が協働して行うことが、「教員の情熱と学生の意欲」を融合させる最短のコースという意味での有効性がありますが、授業改善への大きな一歩を踏み出せるという本来の効果のほかに、そのプロセスを通じて、学生に社会性を身に付けさせるという点でも大きな教育効果を持つと思われます。

「学生に実力と自信を育む」という教育目標を達成できたのかどうかという視点で見れば、この取組が軌道に乗ればその効果は計り知れない程大きいと思っています。

(4) 新たな取組の改善・評価

本取組みが功を奏しているかどうかの評価は、授業を担当している教員やそれをサポートしている職員の、日常の態度の変化に求められるでしょう。それに学生の授業態度もポイントです。こういった観点からの評価は、まず第一に、FD活動の新しい形態ですから、FD委員会の活動報告にも大きく取り上げられます。従来のアニュアル・レポートにもその成果は反映されるはずですが。協働して積み重ねた議論の成果は、当然まとめ、公表されます。またアンケート調査も利用して、これまでとの比較検討がなされ、取組の到達段階もその都度チェックされるでしょう。全学生からの、変化に対する生の声を集め、これもまた報告書にまとめ公表されます。ここでも学生と協働した取組として、評価活動が展開される予定です。このような活動の成果報告者は全学生に渡され、これからをさらに共に考え、改善への手立てとしたいと思っています。これらを支えるための非常勤職員を採用する予定です。

(5) 新たな取組の実施計画・将来性

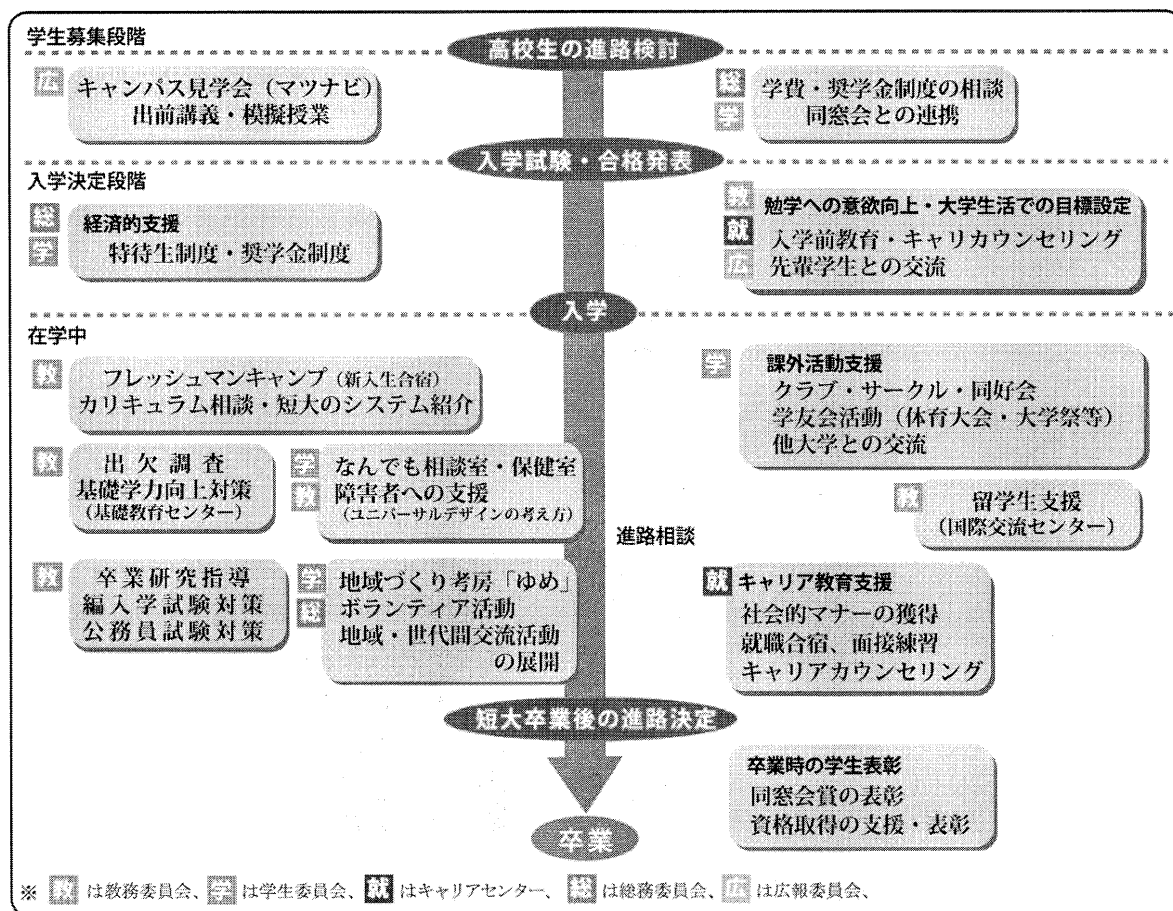
大学運営に学生が参画するという方向は、現在の大学改革の流れを推進しようとするれば、必然性を持っているように見えます。良い授業は結局「教員側の教育に対する情熱と学ぶ側の学習に対する熱意」が融合するところにしか生まれないとすれば、学生のやる気や学ぶ意欲を引き出さなくては、FD活動の究極の目標は実現することができないことになります。すなわち、教員の側に教育への情熱を掻き立たせるだけではなく、学生の側に学びの姿勢を築き上げなければ、FD活動も結局は絵に描いた餅と化してしまうだけでしょう。

もし国外をも含めて、他大学で参考になる事例（大学全体であろうと個人の授業であろうと構わない）があれば、担当することになった学生も連れて見学してみたい。あるいは優れた授業を展開している教員を迎えてFD講習会を開いたとき、そこに学生も参加し、教員の教育談義に加わってもらい、意見も求めたい。将来、学生がどこまで本気になれるか、そうなるための軌道に乗せることが出来るか、1年目はその準備期間であり、調査期間でもあります。もちろん合同で（前にも述べた通り、少ない教職員と、多い学生という構成）のFD委員会も早速立ち上げ、顔合わせから始まって意見を聞きながら、具体的な取組を始めたいと考えています。2年目は、これまで書いてきたように、きちんとした報告書が作成できるような話し合いを持ち、具体的な成果を挙げられるように、学友会活動と連携した実のあるFD活動を展開するつもりです。

2年間でうまく定着し始めれば、補助期間終了後は当然のことながら、ルーチン・ワークとなって継続していくことが重要です。このときは既に、松商短大部の新方式として知られるくらいにはしておきたい。教職員だけの努力では完成できない、困難だけれどもそれだけに魅力的なテーマであり、継続的な挑戦を行うに値する課題だと認識しています。

4. データ、資料等

資料1. 時系列で見た本学の学生支援の取組



資料2. 入学前キャリア教育を報じる本学広報誌「蒼穹」第85号

(11) 平成19年3月18日 松本大学学報 第85号

平成一九年度入学予定者を対象に「入学前キャリア教育」がスタート!

今年も、平成一九年度入学予定者を対象とした「入学前教育」がスタートした。これは、本学キャリア教育の一環として三年前から実施しているものである。

一月八日に行われた「第一クール・集合セミナー」には、平成一九年度から新設される人間健康学部への入学予定者を含む、約四〇名が参加。セルフワークで自分の経験や興味を整理し、さらに先輩学生や他の入学予定者たちとの交流を通して、目的意識や大学生活のイメージをふくませることに取り組んだ。特に、現役松大生が壇上に登場し、学業や資格取得、自治会やサークル活動など、それぞれが力を入れて取り組んだエピソードを披露した。

「先輩学生による大学生活体験報告」は大変好評で、事後アンケートでは九五割以上の参加者が「先輩の話の聞いて、大学生活への意欲が高まった」と答えている。また、恒例となった「グループワーク」でも、教職課程履修の大学三年生がコーディネーターとなり、参加者同士のコミュニケーションが活発にはかわれていた。「いろいろな人と話せた」「他の人の経験や考えを知ることができた」との感想に耳を打って、「先輩が頼もしくてすごいと思った」「自分もあんなふうになりたい」という声もあがっており、関わった先輩学生たち一人ひとりが、大学生活のイメージをつくる「モデル」としての役割を果たしていることがうかがえた。

二月には、今回参加者全員への個別カウンセリングが行われた。カリキュラムや履修説明などを行って、三月二、四日のプレオリエンテーションをもって、プログラム全てが完了する。

(キャリアセンター・澤田)

資料3. 就職活動を控えた後輩に経験談を語るOB・OGや先輩の現役学生



資料4.

広報委員会とともに活躍する
M@tsu.navi (マツナビ)
(キャンパスガイド隊が名称
変更されました)

タウン情報
2002.6.14



資料5.

「大学生からのちょっといい話」の
冊子発刊を報じる地元紙「市民タイムス」

市民タイムス
2007.6.22

